

# 日本文化と禅

西行、道元、良寛の短歌（一）

西行の短歌 …… 斎藤 是心

山と俳句（五） 石鎚山北沢を登る

…………… 井本 光蓮

人間禅の書（三） 釈宗演禅師の書

…………… 藤井 紹滴

禅と囲碁 …… 茂木 道聳



# 西行、道元、良寛の短歌（一）

## 西行の短歌

齋藤 是心

古来、仏門で短歌を詠み残された人という、年代の早い順に西行、道元、良寛の3人が浮び上がる。

西行は西暦1118年に生まれ1190年に帰寂、道元は1200年に生まれ1253年に帰寂、良寛は下って1758年に生まれ1831年帰寂と伝えられている。

いずれもその名は広く知られているが、立ち入って知る人は少ないのではないかと思う。私もその一人であるが、残された短歌のいくつかに触れて、その人柄を偲しのびたいと思う。

### 一 西行の短歌

西行は豪族として、奥州・関東・九州にも一族をもつ武勇の誉れある佐藤家に生まれ、俗名を佐藤義清といい、鳥羽上皇北面の武士として仕え、武人としても歌人としても名声が高かったが、23歳で出家遁世し、高野山・吉野を中心に修行し、諸国へも修行の旅をし、河内葛城山麓さんろくの弘川寺で永眠している。

作歌は早くから教養として学び、鳥羽院関係の文学的雰囲気の中で育てられたが、歌風は『万葉』に近く、宮廷歌人に比べ現実味に優れ、尊重されたという。

出家の理由としては、いろいろに伝えられているが、歌人として自己を生かすために決意されたのではないかともいわれている。

道のべに清水流るる柳かけしばしとてこそ立ちどまりつれ

夏の炎天下を歩いた旅の道すがらであろう。道の傍らに清水の流れている柳の木陰を見かけると誘惑を感じ、しばらくと思って立寄ったが、その快さからつい時を過ぎてしまい、気がついて立上った時の反省の心が詠われている。

一日の旅のうちの何でもなひとときの体験であるが、すがすがしく健康な姿が詠み生かされている。

心なき身にもあはれは知られけりしぎ鳴立つ沢の秋の夕暮

出家してものあわれを解さない私にも、鳴が飛び立つ秋の夕暮れには、しみじみとした哀感を覚えると詠われている。

「鳴」は秋に渡ってくる小鳥で、田や沢や磯など水のある所に居つく。「心なき身」とは、愛憎や喜怒哀楽の心を超えた僧侶の身の意である。「あはれ」は哀感という心の色合い。

鳴の舞い立つ沢に行きあい、折しも秋の夕暮れで寂せきりょう寥感が一段と刺激されたものと思われる。

年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山

69歳の西行が30歳の頃、仏道修行のため越えた小夜の中山を、再び越えて平泉まで赴こうとしている時の歌であるといわれる。

年老いて再び越えようとは思ひもなかったが、命ながらえて今越えようとする小夜の中山よと感嘆している。命ながらえたことに深い感慨があつたものと思われる。独り言のような表現で、作者の氣息が感じられる作品である。

風に靡<sup>なび</sup>く富士の煙の空に消え行方<sup>ゆくへ</sup>を知らぬわが思ひかな

風に靡いている富士山の噴煙は空に消えて行方も知れない。そのように、わが胸中の思いも消えて行方も知れないというのである。

今は胸中一物もなく、あたかも清澄な富士の姿と一体化した身が、大きく客観化されているといえよう。

出家としての西行の到達した境地でもあり、物心一体となって生死をも越えた境が詠われている。

願はくば花の下にて春死なむその如月の望月の頃<sup>きさらぎもちづき</sup>

願うところは桜の下で春死にたい。その2月の満月の頃にという歌意である。

「如月」は旧暦の2月、「望月の頃」は2月15日で釈尊入滅の日であり、仏道修行者としてこの前後に死にたいと思うことは、ひそかな<sup>あこが</sup>憧れであったろう。

この歌は西行がまだ丈夫だった頃に詠み、親しい人びとには知られていたというが、その願いのように1190年2月16日に1日遅れて没したという。

宗教と文芸の願いがこの一首には結晶しており、しかも実現し得たということは驚くべきことであった。

西行の作歌方法は、すべて現実に感得したものを詠み生かしている。仏者として悟った宗教の自然観があり、明るく安らかに即応し、老いを見せないみずみずしさを持ち得ている。まさに人間形成の短歌であったともいえよう。

(つづく)

## 著者プロフィール



齋藤是心（本名 / 正幸）

大正11年、熱海市生まれ。技術士（建設部門）、鉄道建造物の建設と保守に携わる。歌人。昭和28年、窪田空穂門下の大岡博氏に師事。『菩提樹』同人。歌集『秋の陽のなか』『六月の風』。昭和32年、人間禅白田劫石老師に入門。現在、人間禅布教師。庵号/慈雲庵。

## 日本文化と禅

## 山と俳句（五）

## 石鎚山北沢を登る

井本 光蓮

石鎚山には急峻いしづちさん きゆうしゅんな多くの沢が突き上げている。平成10年の秋、若い仲間せっしんえに誘われて石鎚の沢を登った。四国道場で1週間の撮心会が円了し、その翌朝内参会があったため出発が遅れたが、どうしてもこの日しか休みが取れなかったので出かけた。

8時15分道場発、車で登山口の土小屋に着いたのが11時、同行を約したT君とS君はまだ来ないので、T君へのメモを車に残して僕一人先行した。

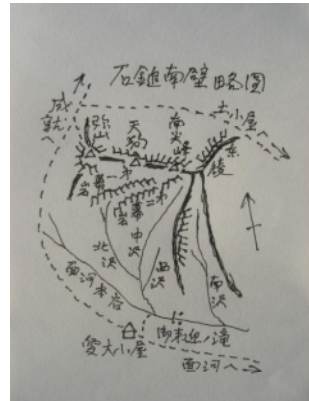
石鎚の沢を登るためには、土小屋から石鎚岩峰群をぐるりと北から西へ回って愛大小屋まで行かねばならない。途中、二ノ鎖下で昼飯を済ませて、シコクシラベの純林を抜けると登山客は一人も居なくなる。おもご面河本谷の源流点を過ぎると、濡れた岩の上にシコクフウロのピンクの花びらが散って、花野が始まった。濃いリンドウに交って咲く白い

シコクイチゲの残花を見つけて思わず駆け寄る。この花は、ここ石鎚山系のごく限られた場所にしか咲かぬ絶滅危惧種なのだ。ゆっくり写真を撮りながら15時30分小屋に着いたが、2人はまだ追いついて来ない。これから登る石鎚南壁にはガスが巻き始め天候は下り坂だ。余りに遅いので待ちかねて、小屋にメモを残し本谷へ尾根を下る。小屋から220m程高度を下げて16時10分谷底に着く。ここからすぐ下流には面河溪最大の名瀑御来迎の滝(87m)が落ちている。谷底から南尖峰(1982m)までは高度差650mの直登だ。本谷から沢に分け入って偵察していたら、下からやっと2人の呼び声が聞こえ、沢の押し出しまで戻って2人と合流、コッヘルにコーヒーを沸かして早速作戦会議。南壁の西沢・中沢・北沢のうち、北沢はむづかしいが一番面白いと聞いていたので、予定通り北沢を登ることに決める。ただ、時間が遅いのと天候が気にかかる。雨が来て岩が滑るようなら引き返すことにして、16時50分出発、まず中沢に入り最初の滝の裾から左股の北沢に入る。

岩の美しい沢で、T君が山椒魚を見つけた。まだ子供でかわいい前足だけが生えている。登る程に20m程の滝が次々に現れ、四つ程滝を越えた後、最後に30mの滝が二つ並び懸かっていた。僕の情報では



愛大小屋(西)よりの石鎚。北沢(点線左)と中沢(点線右)



石鎚南壁略図

右の滝の右側を登れと聞いていたが、先頭のT君ははや両滝の真ん中の草付きに取り付いていたので、これに続く。どうにか手がかりはあるものの、ほとんど垂直の登りだ。

18時滝の上に出る。これで北沢の滝は呆気なく終わったが、これからが本格的なヤブコギ(注1)の始まりだった。18時30分第一幕岩の下に着く。なるほど幕のように垂直に垂れ下がった大岩壁が立ちふさがっている。壁の裾は身の丈ほどの笹ヤブで踏み跡もない。やがて日はとっぷりと暮れ、3人は幕岩に添って右へ右へとヤブを漕ぎ登る。このルートの右側は第二幕岩の絶壁が中沢へと落ち込んでいる。つまり北沢から南尖峰へと突き上げるこのルートは、左側に切り立つ第一幕岩と右側に削ぎ落ちる第二幕岩の狭い間を通して急登している。

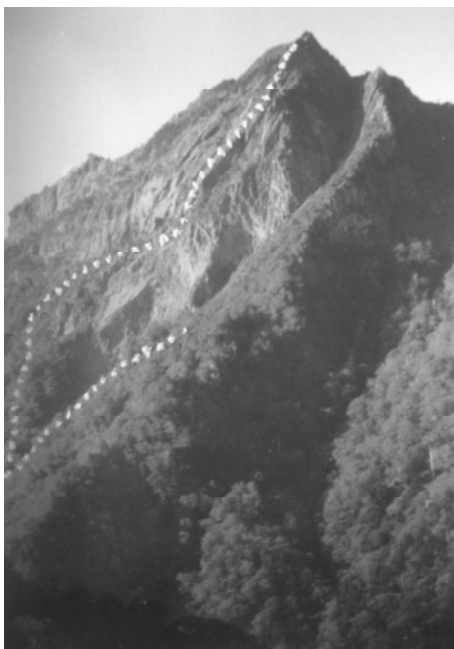
18時50分、ようやく第一幕岩が終わり笹のヤブを抜けたと思ったら、ここからが南尖峰直下の岩登りの始まりだった。辺りは真っ暗になり3人ともライトをつける。月はあるがほとんど雲から顔を出さず、岩場の傾斜は急で高度感があり、岩はつるりとして手がかり足がかりは少ない。ザイルが欲しいところだが、1人では登れぬ岩場も3人なら下から押し上げたり上から引き上げたり、尺取り虫のように行程は意外にはかどる。

いつの間にか本谷から湧き上がる霧が谷を埋めて、岩壁の僕たちを巻き始める。できればこの霧より先に登り切りたかったのだが、ヘッドランプの明かりは霧に乱反射して白い光芒となり、ルートファインディング(注2)は困難、岩場を這いながら3人のライトが思い思いにルートを探れば、霧に突き刺さる光の棒はまるで虫が振り立てる触角のようだ。

傾斜がますます急になり、これ以上前進できなくなったトップのT君が壁にへばりついたまま、体全体の摩擦を利用して横へ移動しようとむつかしいことを言う。そんな岩登りは聞いたことがない。吸盤があるわけじゃなし、その実は3人共芋虫のように尻<sup>へ</sup>っぱり腰で横へ横

へ横へとうごめているだけだ。

19時10分絶壁の岩場によりやく足を乗せられる岩棚を見つけ、3人は岩にもたれてやっと一息入れる。こんな場所でこれ以上不用意には動けない。高度計はまだ1780m、真正面に二ノ森（1929m）と五代ヶ森（1707m）が雲海に黒い頂を出して浮かぶ。おもむろにザックから残りの食糧を取り出し、分け合って腹ごしらえをすると、ようやく人心地がついた。



19時30分出発、時折月明かりの中で右上方に仰ぐ針峰群はど

石鎚スカイライン（南）よりの石鎚。北沢（点線上）と中沢（点線下）。左寄りの白いのは山頂小屋

うやら南尖峰直下の柱状節理（注3）、通称墓場尾根のようだ。ようよう怖い岩場を抜けると今度は荒い茨いばらのブッシュに突入し両腕は傷だらけ。どうやら絶壁の上部をトラバース（注4）しているようだが、幸い足元まで雲海が寄せて高度感はない。最後は遮しゃにむに二無二ブッシュを漕ぎ抜けて力任せに岩棚かに掻き上がると、そこはこれまで何度も来たことのある墓場尾根だった！すぐ目の前に見慣れた大砲岩もそびえている。僕らはようやく2本足で立てる場所までやって来たのだ。

20時5分南尖峰に這い上がって3人で岩に腰を下ろす。これでもう登りはない。摂心会の疲れも登攀とうはんの疲れもすっかり忘れ果てた僕らに、深まりゆく秋の夜風が心地よく身に染みた。僕は大好きな王維の句を思い出していた。



ゆ  
行いては到る水の窮まる 処  
坐しては看る雲の起こる時

僕らは今やこの詩の通り、北沢の源流を窮めて南尖峰の絶頂に到り、岩に坐して面河本谷から湧き起こった雲海の真っ只中にいるのだ。しばらくは黙したまま至福の時間が流れた。

余りに霧が深いので危険な東 稜を下りるのを止め、最高峰の天狗嶽（1982m）から弥山の山頂小屋を経て下山を始める。まるで鼻をつままれたようなホワイトアウト(注5)の濃霧の中を、無事土小屋へ下山、ちょうど22時だった。

手早く着替えを済ませて車で出発、23時10分国道194号に出て最初に見つけた公衆電話から家へ下山を知らせる。帰宅は0時35分だった。同行のT君とS君に深謝する。

シコクイチゲにひざまづきけり神の山

石鎚を滴る沢の山椒魚

むす て  
掬ぶ掌に草の実速き小滝かな

月の出を仰ぐ岩場の霧の底

お ぜってん  
登攀了ふ絶巔深き闇と霧

稿の終わりに：いつの間にか年を取って、雪山や単独行で味わう厳しい自然からは次第に遠ざかったが、老妻や親しい友人たちと連れ立って里山を逍遙する時など、大自然と一つになって生かされている命のありがたさを、ますます痛感するようになった。残り少ない一日

一日を、願わくば最期まで自然体で生きたいものである。

合掌

### 編集部注

(注1) ヤブコギ<sup>やぶこ</sup>：藪漕ぎ。登山などで、道のない密生したヤブの中を笹や木の枝をかき分けて進むこと。

(注2) ルートファインディング：登山で、登頂・登攀などの道筋をさぐること。

(注3) 柱状節理：マグマが冷却固結する時に生ずる柱状の割れ目。福井県東尋坊は、柱状節理のためにできた奇勝。

(注4) トラバース：岸壁や山腹を横切ること。

(注5) ホワイトアウト：吹雪や霧で視界が極端に悪くなる状態。

### 著者プロフィール



井本光蓮<sup>こうれん</sup>（本名 / 淳作）

昭和3年、高知県生まれ。上原商店社長。昭和39年、人間禅白田劫石老師に入門。現在、人間禅特任布教師。庵号 / 竜穩庵。

# 人間禅の書(三)

## 釈宗演禅師の書

藤井 紹滴

この書を見て、人はどう考えるか？ うまいのか、まずいのか、いいんだか、悪いんだか、何と読んだらいいのか。理解に苦しむだろう。しかし、何か違うものがあると思うにちがいない。この墨跡は、明治、大正期の鎌倉円覚寺管長 釈宗演禅師のものである。禅師は、安政6年福井県高浜村に生まれ、大正8年帰寂。61歳。12歳京都妙心寺にて得度。のち円覚寺にて今北洪川禅師に参禅。人間禅初世総裁立田英山老師の師であった釈宗活老師の師という縁をもって、人間禅の書の系譜に入れさせてもらいました。

この書の詩は、明の<sup>いくどう</sup>栢堂禅師の『山居詩』、七言律詩五首のうちの第三首の後聯( <sup>こうれん</sup> )である。第三首の全文は下記の通り。

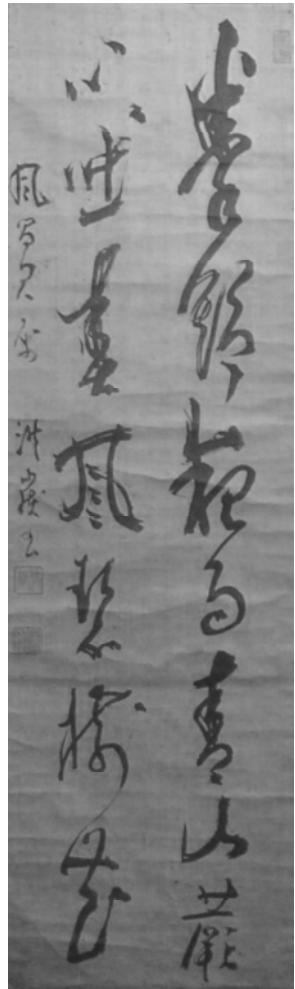
人間紅日易西斜	じんかん かたむ やす 人間の紅日、西に斜き易く
萬巧施為総莫誇	ばんこう し い す 萬巧の施為(しわざ)、総べて誇ることなし
剖出無瑕方是玉	む か ぼうしゆつ まさ こ 無瑕を剖出(弁別する)すれば、方にはれ玉
畫成有足即非蛇	が すなわ 畫成りて足あれば、即ち蛇にあらず
拳舒夜雨青山蕨	こぶし の わらび 拳夜雨に舒ぶ、青山の蕨
心吐春風碧樹花	へきじゆ 心 春風を吐く、碧樹(緑に茂る木)の花
世念一毫融不盡	せいねん いちごう と つ 世念(俗念)一毫、融くれども盡きず
功名捷徑在煙霞	しょうけい えんか 功名の捷徑(早道)、煙霞(山水の楽)に在り

の「拳舒」は『寒山詩、附栢堂詩』(清世宗 <sup>ちよくへん</sup> 勅編、清光緒11年(1885

年)刊)では「拳伸」とある。蕨のこぶしが夜雨で「のびる」の意で平仄ひょうそくも同じく平で、どちらでもよい。「青山」は「青林」とあり、対句の句法からは「林」がよいが、「青山」の方が場面が大きい。宗演禅師は改定稿を見られたのであろうか。の意味は、「青山の蕨のこぶしが夜雨によってのび、心が春風を吐けば、緑の樹に花が開く」となる。

それでは、一字一字読みながら見てゆきます。豪壮に書き始めた「拳」も、二字目の「舒じょ」で送筆が怪しくなってくる。三字目の「夜」になると、もう筆は動かない。四字目の「雨」は軽く納めるのみで、書き始めの気迫はすでない。「青山蕨」になると、スタートダッシュした人が、走るのをやめ歩きだしている姿である。「蕨」にいたっては、もう字なんかどうでもよい。筆先の細かい配慮もない。二行目に移ると「心」「吐と」の点にいたっては、想像を絶し、常人の考えの及ぶところではない。「春」では調子を立て直すも「風」の奇怪な用筆は、この人一体何を考えて筆を執とっているのか解らない。一画目から二画目、さらに三画目への意表をついた動きは、羨うらやましいぐらい無造作の極。こういう境地を書法では「跌宕てつとう」という。「碧樹」は平凡に流して、最後の「花」は動かなくなった筆を何とかひきずって、よくもこんな不可解な姿にまとめたものだ。

以上、否定的に、あるいは常識的に述べてみましたが、ここからは、全く反対に肯定的に見てみましょう。



釈宗演禅師の書

これは絹本けんぼんに書いているので、筆の墨が布に吸われて、枯筆になりやすいという技術的問題は別にして、文頭に書いたように、うまいんだか、まずいんだか、いいんだか、悪いんだか、強いんだか弱いんだか、全くとらえようがありません。子細にみれば、上述のことが即、妙所。どれもこれも実に面白い。宗演禅師の面目躍如。すなわち筆使いの失敗そのものが、気持の取り回しの妙で、少しもおかしくない。自然である。そしてヨタヨタしているどころか、全体にピシッと正念が貫かれ、揺るぎのないものがある。風格といい、奥深さといい、誠に恐ろしいものがある。見ていればいるほど良く見えてくる。本当に面白い。こういう書に会うと、書法に苦心、努力した能書といわれる人の書とは、一体何の意味があるか考えさせられる。規模も間尺も全く別次元なのだ。姿こそ前回の宗活老師の鍛え上げた書とは全く逆の表現であるが、しかし、お二方のピシッと貫かれた正念の恐ろしさは、全く一致している。「書はその人以上には書けぬ。上達したければ、心を錬ねるにしくはなし」である。本当に恐ろしい。

この拙文を読んで後、改めてこの書を十分に味わってほしい。他日見れば、またまた新しい発見があるはずです。

落款識は、「風間君たのみの属こうがく 洪嶽書」。印影は、「洪嶽」「宗演」。ただし、印を押す順序に誤りがある。すなわち白文の「宗演」が上で、朱文の「洪嶽」が下でなければならぬ。関防印は「関不徹」。表装は揉み紙で、左右に一線が入った明朝仕立て。軸頭は鹿の角軸。収蔵者は、佐藤妙珠禅子。

### 著者プロフィール



藤井紹 滴しやうてき（本名 / 頼次）

昭和15年、東京生まれ。会社経営。金子清超先生から儒学、書を学ぶ。無窮会にて儒学研究。研究にゆきづまり、昭和46年以來、長屋喜一先生から禅の指導を受ける。昭和61年、人間禅白田劫石老師に入門。現在、人間禅輔教師。

# 禅と囲碁

茂木 道聳

## 一 はじめに

皆様今晚は、中央支部（現京葉支部）の茂木道聳<sup>どうしょう</sup>でございます。

私は、昭和53年磨甑庵劫石老師<sup>ませんあんごっせき</sup>に入門させていただきました。以来早くも30年の歳月が流れ、頭に霜を頂く73歳となりました。

初関「本来の面目」のお許しをいただいた時は、天と地がひっくり返りました。家の庭で大の字になり、星空を見上げていると、心の底からと申しますか、全身をグ〜ング〜ンと突き上げる歓喜の鼓動が続き、まさに大地の鼓動、宇宙の鼓動と一体化したと申しますか、かつて経験したことのない高揚感が続きました。その時、隣の家の黒犬が私の額をペロリと舐<sup>な</sup>めて何事もなかったように立ち去ったあの感触は、30年経った今でも鮮明に覚えております。

以来愚鈍な私は、他人様が1年で修得できることが3年、5年とかかりましたが、他人様と競うことなく、一步一步踏みしめながら修行させていただきました。最近、ようやく「我が人生悔いなし」と、老妻と二人市井の片隅で、肩寄せ合って暮らしております。

これもひとえに、老師様・道友・皆様のお陰でございます。誠にありがたいことでございます。これからは富士の裾野の一石として、万分の一のご恩返しができますよう、努めてまいりたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 二 囲碁の世界

さて大分前置きが長くなってしまいましたが、今回は私が永い間趣味として親しんでまいりました、囲碁の世界の事をあれこれと申し上げてみたいと思います。

囲碁は4000年前、天竺（インド）で発祥し、中国を経て、留学僧が経典とともに日本へ持ち帰り、日本で完成されたという説が有力でございます。

世界の文化遺産である禅と、世界の文化遺産である囲碁は、相通じるものが多くあります。例えば一例としまして、囲碁に没頭している時の集中力・三昧力は、庭先にゴロゴロ〜ッと雷が落ちてても、気がつかない程のものがあります。【おうむしよじゅうにしょうごしん 応無所住而生其心】の世界でございます。このような集中力・三昧力が、グルッと一回転すれば禅そのものですが、「碁打ちそれを知らず」ということでございます。

それでは、囲碁とはどういうものでしょうか？

約40cm×40cm角の碁盤の中に、縦19路、横19路の線が引かれております。19×19=361の升ますの交点に、白石と黒石を交互に打つての、陣取り合戦のゲームです。碁を知らない人が見たら、碁盤は40cm×40cmの狭い世界と感じるかと思いますが、一度碁を知ってしまうと、碁盤は無限の可能性を秘めた世界となります。一つも石の置いてない碁盤は狭いのですが、一旦石たんが置かれ石数が多くなればなる程、人智では計ることのできない小宇宙が出現いたします。コンピューターでも計算しきれない、右脳・感性の世界で、限りなく神の領域に近くなります。ちなみに、将棋は縦9路、横9路、9×9=81の升目です。将棋は指す、碁は打つと申します。将棋を打つ、碁を指すとは申しませぬ。

碁の力量に差がある場合は、ハンディを付けます。例えば、初段の人と三段の人が打つ場合、初段の人が最初にハンデキャップとして2

目石を置かせてもらいます。そうするとこの2目のために全く互角の力量になってしまい、おもしろく対戦できるのであります。男・女・大人・子供・言葉の通じない外国人でも、ルールは世界共通ですので、全く同じ条件で楽しむことができます。

碁のことを別名「手談」と申します。手で談ずる、すなわち言葉はいらぬ、ということでございます。日本と中国が国交のなかった時代に、自由民主党の松村謙三氏と中国の外交部長（日本の外務大臣）陳将軍が、日本と中国の貿易の件で2日間会談をしましたが、両国の体制の違いのためどこまでも平行線で、なかなか結論が出ません。両者ヘトヘトになってしまいました。そこで、陳将軍より提案がありました。「3日目は休養日にして、また再開しましょう。ところで貴方は碁を打ちますか？」と聞かれたそうです。松村氏が「私も碁は大好きです。」と答えると、「では休養日は碁を打ちましょう。」ということになり、3日目は<sup>ざんまい</sup>囲碁三昧で過ごし、両者は「肝胆相照らす」互いに心を許し合う友人となりました。4日目の会談で主義・主張は別として、「日本と中国の百年の計として貿易を先行させましょう。」との結論になり、日本と中国の経済交流の端緒となったという話は有名でございます。

### 三 囲碁と人間形成

碁の素晴らしいところは、良い仲間に出会えるということです。  
<sup>マージャン</sup>麻雀は何回やっても、金銭のやりとりがありますので、なかなか仲良くなれませんが、囲碁は一度対局すれば、言葉は必要もないほど親しくなることができます。一局の碁は、よく<sup>しゃば</sup>娑婆の<sup>たと</sup>変遷と人の一生に譬えられます。布石、中盤、終盤と息の長い勝負であり、地所獲得という地味な経済ゲームであると同時に、華やかなチャンチャンバラバラの殺し合いでもあります。

5～10手ぐらいまでは、どんな初心者でも堂々たる宇宙規模の構え



であります。石と石の接触が始まると食うか食われるかの弱肉強食の世界に入ります。自分の強いところでは、攻撃は最大の防御と攻めに攻めたてる、自分の弱いところではひたすら恭順し守りに入る、まさに山あり谷あり、ドンデン返しありです。宇宙規模から人間臭さまでの、多重層的なところも囲碁の大きな魅力です。

それから碁は、まさに経営そのものであります。すなわち大局観を持ちつつ、小局面を丁寧に用心深く読んでゆく。言い換えると全体戦略と部分戦術の両面ともにしっかりしていなければ、昨今のような大不況時には生き残れないのであります。

また、先程殺し合いとか弱肉強食とか言いましたが、碁の場合の戦いには、基本的に相手のミスを期待しない勝負であります。お互いの戦略戦術のベストを尽くした読みの勝負であります。麻雀のような偶然が限りなく少なく、常に自分で考え自分でその責任を取るということであり、全て読みの勝負であります。この一着手は確信の一手なのであります。ついているとかいないとかは、最初から期待しないのであります。ここら当たりが、対戦した後、負けても勝っても肝胆相照らす知己になる由縁であり、一局の付き合いは人生を共に味わうようなものであります。まさに人間形成の積み上げ、深まりと共に、碁境も高く深くなるというものであります。

太古中国では、碁盤は天文曆に使われておりました。碁盤の中に星、天元という場所があります。碁盤は大地を形作り、目の数361の数は易(占い)の象数から出ております。一は万物を生ずる根源であり、360路は四分割して春夏秋冬の四季を表し、石数361は、昼と夜との交替、陰と陽を象徴しています。

起源は4000年前という、まさに神韻<sup>ひょうびょう</sup>縹渺たる世界でございます。日本へ伝来したのは、西暦630年頃との説が有力です。

#### 四 日本における囲碁の歴史

では、どのような人が碁を嗜んだのでしょうか？

すがわらのみちざね  
菅原道真（845～903年）には、囲碁賛歌の他四編の碁の漢詩があります。また、日蓮宗の開祖日蓮が1253年の正月に鎌倉で打った碁が、日本最古の棋譜として残されており、楠木正成の子 楠木正行が、11歳の時（1287年）家来の侍と碁を打った記録があります。

囲碁は、初めは宮廷を中心に皇族や官吏の間に広まりましたが、「碁・棋・書・画」は宮廷サロンの知識人に必須の教養で、その一つに碁（碁）が入っていたようです。『源氏物語』の紫式部、『枕草子』の清少納言に見られるように、女性も嗜むようになりました。『源氏物語』「空蝉の巻」に、囲碁の対局場面がいくつか登場しますが、紫式部や清少納言の実力は、その囲碁用語の使い方や表現からして、現在のアマチュア初段ぐらいであったろうとは、今日のプロ棋士の判定でございませう。誠に興味深く、ワクワクするような話でございませう。

その後、囲碁は僧侶・武士・一般人へと広まってきます。鎌倉時代には貨幣経済となり、全国的に銭が用いられるようになりました。そのため、武士も平民も銭を求める風潮が強くなり、賭博に明け暮れる人が多くなりました。1261年には賭博禁止令が発令されますが、それには「碁将棋は其の限りに非らず」とされていました。碁はいつの時代でも、他のギャンブルとは全く異質のものとの認識がございました。鎌倉時代に碁は武家社会に広く浸透し、武将の嗜みの一つとされました。戦国武将の武田信玄対高坂弾正、真田昌幸対信幸親子の棋譜がともに残っております（1566年）。信長、秀吉、家康は、初代本因坊「算砂」に五目で指導を受けており、千利休は秀吉より2目は強かったとの説もあります。

松尾芭蕉の句に 道すがら美濃で打ちける碁を忘る というのがあります。旅の途中、美濃で一緒になった人と歩きながら、黒「17の4」白「4の3」とか言って、盤と石なしでそれ碁を打ったが、宿に着いてその碁を再現しようとして思い出せなかったとの意です。藤沢秀行

プロは「盤と石なしで、そら碁の打てる芭蕉はプロ級の実力、芭蕉こそ我が国千数百年にわたる文芸史上最強の巨人であろう。」と絶賛しております。

35歳で亡くなった正岡子規は、ベースボールの句が多く、野球殿堂に入っているそうですが、囲碁の句も20句と多く、囲碁殿堂入りの候補にも上がっておりますので、近い将来囲碁殿堂入りが実現するのかなと思います。代表的な句としましては、碁に負けて忍ぶ恋路や春の雨 真ん中に碁盤裾たる毛布かな などがあります。夏目漱石の代表作『吾輩は猫である』の中に、碁打ちでなければ表現できない場面が活写されております。漱石の俳句と囲碁の先生は、正岡子規だそうです。1996年（平成8年）宇宙船「エンデバー号」の船中で日本の宇宙飛行士若田光一氏の囲碁対局のニュースは、世界の囲碁愛好家を興奮させました。

戦後の歴代総理大臣のうち囲碁愛好家を調べてみますと、芦田均・鳩山一郎・石橋湛山・岸信介・池田勇人・佐藤栄作・田中角栄・福田赳夫・大平正芳・鈴木善幸・竹下登・海部俊樹・細川護熙・羽田孜と多彩な顔ぶれです。真偽のほどは分かりませんが、細川護熙<sup>もりひろ</sup>は碁を覚え、田中角栄に近づき、細川政権の碁をつくったとの噂話もあります。旬の政治家では、民主党代表小沢一郎と自民党の与謝野経済財政担当大臣は、長年の碁の仲間です。両者ともなかなかの打ち手で、五段と称しておりますが、私が見たところ限りなく六段に近い五段かなと思います。テレビ対局では、プロのビッグタイトルである名人戦や本因坊戦などでも、マスコミの取材は15名ぐらいですが、小沢対与謝野の対局となると50名以上のマスコミが集まるそうです。近い将来政界再編ともなると、小沢～与謝野の線もひよっとすると、ひよっとするかなと思われまます。

## 五 現代の囲碁界

囲碁の世界では、江戸時代この方、日本のトップは世界のトップでした。その後も20年ぐらい前までは、日本が圧倒的に強く、まさに日本のお家芸として世界に君臨しておりました。韓国、中国がもし日本に勝つことがあれば、それこそ国をあげてお祝いをしておりました。

が、ここ15年位前から、韓国・中国の台頭により、日本一強の時代は完全に崩れさりました。国際棋戦で日本のトッププロは、決勝戦はおろか準々決勝にもなかなか残れなくなってしまいました。日本が勝てなくなった原因はいろいろありますが、韓国や中国には、囲碁は世界の文化遺産との認識があり、その認識の違いが大きな原因です。

中国の場合、先程申し上げた陳将軍が、囲碁の世界でも日本に追いつけ追いつけと中国全土に檄<sup>げき</sup>を飛ばし、生活にも困窮していた老棋士を集め、その生活を保障して少年少女の囲碁教育に当たらせました。現在中国では、囲碁は義務教育の一環として完全に認められており、各都市ごとに優秀な子供を集めて学ばせ、さらにその中でも特に優秀な子供を北京や上海の大都市に集めて学ばせ、中国棋院の研究生として24時間碁漬けの生活をさせています。中国では、囲碁は頭脳スポーツとして、水泳・体操・サッカー等と同じように捉<sup>とら</sup>えられておりますので、体育宮（体育関係の官庁）に属しております。

韓国の場合、1954年に韓国棋院が創立されましたが、当時の棋士に対する社会認知度は低く、半ばバクチ打ちと混同されておりました。その後、6歳で来日した韓国人趙治勲<sup>ちょうちくん</sup>が、24歳で日本の名人位を獲得しました（1984年：昭和59年）。以後10年間日本棋院の王者として君臨しました。同時に韓国の囲碁ブームが起こり、子供囲碁教室が登場し、現在では3,000教室で50万人の子供が囲碁を習っているといわれています。学校側の理解や協力も行き届いており、児童の対外試合には出欠の便宜を図っております。このように、子供達が囲碁に没頭できる環境が整えられています。

韓国・中国で、囲碁の世界で頭角を現わすことができれば、普通の

サラリーマンの100倍ぐらいの収入があるといわれております。ハイリスクハイリターンのある世界でございます。強くなるわけです。この右脳・感性の世界は、子供の頃どれだけ囲碁に接していたかが勝負です。成熟した日本社会では、昼間は学校へ行き、塾に行き帰って来てからようやくですから、この差は絶望的な大きさでございます。底辺が全く違います。これからの日本はなかなか大変です。

## 六 人間禅囲碁連盟・棋禅一味の会

「<sup>ま</sup>蒔かぬ種は生えぬ」という<sup>ことわざ</sup>諺がありますが、将来我が禅門より国際棋戦でも通用する児孫が育つようにとの願いを込めて、平成14年に<sup>ほうこうあんしゅんたん</sup>葆光庵春潭総裁老師（当時総務長）が私とともに人間禅囲碁連盟を立ち上げられました。中央支部と坂東支部の会場持ち回りで、年1回交流試合を開催しております。平成20年の第7回大会は坂東支部で開催しましたが、新たに東京第一支部（現埼玉支部）と北越支部（現新潟支部）からも参加いただき、その輪は次第に広がっております。次は外部の方々にも一緒になっていただき、孫・曾孫の時代には大きく花開くようにと布石をしております。

平成20年10月3日（金）市川の坐禅道場の留護寮で、開かれた道場の一環として「棋禅一味の会」と銘打ち、第一回囲碁大会を開催しました。大会に先立って道場の由来や坐り方を説明した後、約20分静坐をしました。参加者は、次の12名でした。

桃雲居士人脈：「デルタ38会」4名（竹内七段、藤上七段、箱田五段、木村二級）

道聳人脈：5名（化研病院坪内七段、市川市大林三段、渡辺二段、御酒本二段、茨城大伊藤五段）

大会の結果は、次のとおりでした。

- |    |    |       |     |      |
|----|----|-------|-----|------|
| 一組 | 優勝 | 道聳五段  | 準優勝 | 伊藤五段 |
| 二組 | 優勝 | 御酒本二段 | 準優勝 | 大林三段 |

参加した人は皆、地元こんな立派な道場があったのかと目をむいてビックリしておりました。この道場で孫を教育してもらいたいものだと言う方もおられました。祖牛居士、桃雲居士のそれぞれのお人柄と気配りによって十分におもてなしをしていただき、皆さんカルチャーショックとともに、大変満足して帰っていかれました。

かくのごとく、一見すると坐禅道場と囲碁は全く無関係のようですが、最初に数息観を行じて集中力を高め、静かな環境で一心不乱に囲碁に打ち込むのは、まことに「碁禅一味」の佳境でございます。

「初めの一步」(第一回囲碁大会)以来、我が禅門の布石の回り舞台は、静かに確実に回り始めております。囲碁の世界にも、人間禅の精神は素晴らしい広がり期待できそうです。

皆様のご理解を賜り、どんどんこの輪が広がっていくようお力添えをお願いいたします。どうぞよろしく申し上げます。

ご清聴ありがとうございました。

合掌

(平成20年12月5日、中央支部(現京葉支部)第183回撰会  
会の法話より)

## 著者プロフィール



茂木道<sup>どうしょう</sup> 聳(本名/日出男)

昭和10年、茨城県生まれ。昭和47年起業。平成15年、事業を子息に譲り引退。現在、矢切の渡し近くで農業。地元集落世話人、神社氏子総代。昭和53年、人間禅白田劫石老師に入門。現在、人間禅布教師。